

『古今集』物名の部の構造

平 沢 竜 介

『古今集』物名の部は、「鳥」「虫」「植物」「地名」「雑名」の歌群から成る。このうち「雑名」の歌群は、「百和香」「すみながし」「おき火」「ちまき」といった種々雑多な身のまわりにある物の名が詠み込まれており、他の歌群に比べて、詠み込まれた物の名にまとまりがなく、「鳥」「虫」「植物」「地名」を詠み込んだ歌群に分類しきれなかった物名歌を集めた、いわばその他諸々の物の名を詠み込んだ歌群という性格を持つ。故に「雑名」の歌群は、物名の部の最後に配置されることとなり、「雑名」と性格の近い「地名」を詠み込んだ歌群がその前に置かれることになったのであろう。

「鳥」「虫」「植物」を詠み込んだ歌群の配列順は、「鳥」「虫」を詠み込んだ歌群がそれぞれ二首で構成されているのに対し、「植物」を詠み込んだ歌群は三十首から成る。「地名」を詠み込んだ歌群が八首、「雑名」の歌群が五首で構成されていることからすると、撰者たちは、最も規模の大きい「植物」を詠み込んだ歌群を部立の中央に置き、その前後に小規模な歌群を置くことを意図して配列したのではなからうか。その結果、物名の部は巻末に、「雑名」の歌群、その前に「地名」を詠み込んだ歌群、さらにその前に「植物」を詠み込んだ歌群という配列になったので

あろう。「鳥」を詠み込んだ歌群と「虫」を詠み込んだ歌群は、「鳥」よりも「虫」の方が「植物」に近いということ、ならびに「鳥」を詠み込んだ歌群は、「うぐひす」「ほととぎす」と春、夏の鳥を詠み込んだ歌で構成されているのに対し、「虫」を詠み込んだ歌群は「うつせみ」という夏の物の名を詠み込んだ歌で構成されていることから、まず「鳥」を詠み込んだ歌群が巻頭に配され、次に「虫」を詠み込んだ歌群が配されるということになったのであろう。¹⁾

『古今集』物名の部は、このようにして「鳥」を詠み込んだ歌群、「虫」を詠み込んだ歌群、「植物」を詠み込んだ歌群、「地名」を詠み込んだ歌群、「雑名」の歌群の順に配列されることになったと考えられる。

まず、物名の部冒頭の「鳥」を詠み込んだ歌群と「虫」を詠み込んだ歌群を示してみよう。²⁾

うぐひす

藤原敏行朝臣

422 心から花のしづくにそほちつつ憂くひずとのみ鳥の鳴くらむ

ほととぎす

423 来べきほど時すぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をとよむる

うつせみ

在原滋春

424 波のうつ瀬見れば玉ぞ乱れける拾はば袖にはかなからむや

返し

壬生忠岑

425 袂よりはなれて玉を包まめやこれなむそれと移せ見むかし

これら四首のうち前半二首は、422は鶯、423は郭公と鳥を詠み込んでいるのに対し、424、425はともに空蟬を詠じており、422、423は「鳥」を詠み込んだ歌群、424、425は「虫」を詠み込んだ歌群とすることができよう。

「鳥」を詠み込んだ歌群は、422の鶯が春の鳥であるのに対し、423の郭公が夏の鳥であることから、この二首は鳥の現れる季節の順に配列されたのであろう。「虫」を詠み込んだ歌群は、424、425の二首が贈答歌であることから、贈答である424が先、答歌である425が後の順に配列されたと考えられる。なお、422から425の作者は、いずれも撰者時代の歌人である。続く426から455まではいずれも植物を詠み込んだ歌が続く。これらの歌群は「植物」を詠み込んだ歌群とすることができよう。そのうち、426から434までを示すと次のようになる。

うめ

読人しらず

426 あな憂目につねなるべくも見えぬかな恋しかるべき香はにほひつつ

かにはざくら

つらゆき

427 かづけども波のなかにはさぐられで風吹くごとに浮き沈む玉

すももの花

428 いま幾日春しなければうぐひすものはながめて思ふべらなり

からもの花

ふかやぶ

429 逢ふからものはなほこそ悲しけれ別れむことをかねて思へば

たちばな

小野滋蔭

430 あしひきの山たちはなれゆく雲の宿りさだめ世にこそありければ
をがたまの木

とものり

431 みよしの吉野の滝に浮かびいづる泡をか玉の消ゆと見つらむ

やまがきの木

読人しらず

432 秋は来ぬ今やまがきのきりぎりす夜な夜な鳴かむ風の寒さに

あふひ かつら

433 かくばかり逢ふ日のまれになる人をいかがつらしと思はざるべき
434 人目ゆるゑのちに逢ふ日のはるけくはわがつらきにや思ひなされむ
「植物」を詠み込んだ歌群のうち、426から434までは、いずれも「木」が詠み込まれている。

426の「梅」から429の「からもの花」までは、428、429が「すももの花」「からもの花」というように木の花を詠じており、426、427は詞書では「うめ」「かにはざくら」とあり「木」を詠んだのか、「木の花」を詠んだのか分らないが、歌の内容は「梅の花」や「かには桜の花」を詠じているというように、いずれも木の花を詠み込んでおり、「木の花」を詠み込んだ歌群と見ることができる。

一方431から434までの歌は、431が「をがたまの木」、432が「やまがきの木」というようにいずれも「木」を詠み込んでいるが、それらの木の花は際立って目立つ花でないことからすると、431、432は「木の花」よりも「木」そのものを詠み込んだものと見るのが妥当であろう。433、434に詠み込まれる「かつら」も目立った花を付ける木でないことからすると、433、434の「かつら」も「木」が詠み込まれた物名歌と見ることができよう。とすると、431から434までは「木」を詠み込んだ歌群ということになる。また、「木の花」を詠み込んだ歌群と「木」を詠み込んだ歌群の間にある429「たちばな」を詠み込んだ歌は、「木の花」を詠み込んだ歌とも「木」を詠み込んだ歌とも両様に解釈できる。429がこの位置に置かれたのは、「木の花」を詠み込んだ歌群と「木」を詠み込んだ歌群の両方に属し、

両者の連続をスムーズにする役割を担わされているためと考えられる。

426から429の「木の花」を詠み込んだ歌群のうち、426、427は詞書だけ見ると、「木」を詠み込んだ歌が「木の花」を詠み込んだ歌か不明であるが、先にも述べた通り、歌の内容を見ると、この二首は「木の花」を詠み込んだ歌と解される。また、それに続く428、429は詞書に「すももの花」「からももの花」と木の花を詠んだことが明記されている。撰者たちは、426から429までの歌群が「木の花」を詠み込んだ歌群であるということを明確に示そうとして、木の花を詠み込んだと明記されない二首を前に配置し、木の花を詠み込んだと明記された二首を後に配置するという工夫を施したのであろう。

また、「鳥」「虫」を詠み込んだ歌群では、前にある「鳥」を詠み込んだ歌群が二首とも題と歌の内容が関係するのに、後に置かれた「虫」を詠み込んだ歌群では題と歌の内容が関係を持たないのと同様、「木の花」を詠み込んだ歌群でも、前半二首の題と歌の内容が関係を有するのに対し、後半二首は題と歌の内容とが関係を持たないという点も注目される。

先に配置されることになった426、427の二首は「うめ」の方が「かにはざくら」より先に開花することから、「うめ」を詠み込んだ426が先に配され、「かにはざくら」を詠じた427が後に置かれたのであろう。後に配されることになった428、429の二首も428の「すももの花」の方が開花時期が早いことから、429の「からももの花」の前に置かれることになったのであろう。

430の「たちばな」を詠み込んだ歌は、先にも述べた通り、「木の花」を詠み込んだ歌群と「木」を詠み込んだ歌群の両者を結び付ける働きを有するが故に、両者の歌群の真ん中、「木の花」を詠み込んだ歌群の最後で、「木」を詠み込んだ歌群の最初の位置、すなわち430の位置に置か

れたと考えられる。また、426から429までの歌群に詠み込まれた「木の花」がいずれも春に開花するの木の花であるのに対し、430に詠み込まれた「たちばな」は夏に開花する木の花であることも注意されよう。

「木」を詠み込んだ歌群は、まず最初の431、432に「をがたまの木」「やまがきの木」というように「木」という語を付した詞書が記され、「木」を詠み込んだ物名歌であることが明示される。「をがたま」は「モクレン科の常緑高木。高さは十五、六メートルにもなる。関東以西の山地に生え、神社などに植える。幹はよく枝分かれし、長楕円形で、固い光沢のある葉を密につける。春、香りのよい径約三センチメートルの黄色みを帯びた花が、葉腋から出た太い柄の先に一つ咲き、花の終わったあと、いびつな球状の果実が松かさ状につく」とあり、「やまがき」は『倭名抄』に「鹿心柿 夜末加岐 柿之小而長也」とあり、「カキノキ科の落葉高木。本州、四国、九州の山地に生える。カキの変種。カキに似るが、果実はごく小さく、渋みが強い」とされる。

431、432の配列順は、「をがたま」が春花を咲かせて夏実を結ぶのに対し、「やまがき」が夏花を咲かせて秋実を結ぶというように、開花、結実の時期が「をがたま」の方が「やまがき」よりも先であるという点によると考えられる。また、431、432の二首の歌群の前の427から430までは皆作者判明歌であり、431、432の歌群の後の433、434の作者が読人しらずであることから、撰者時代の歌人の歌である431が前に、読人しらずの歌である432が後に配されたとも考えられる。

「をがたまの木」「やまがきの木」を詠み込んだ歌に続くのは、「あふひ」と「かつら」を詠み込んだ433、434である。この二首に詠み込まれている物の名のうち、「かつら」は木であり、目立った花を付けないことから、「をがたまの木」や「やまがきの木」を詠み込んだ歌同様「木」

を詠み込んだ物名歌と考えられる。ただし、「かつら」とともに詠み込まれている「あふひ」は草花であり、433、434の二首以降435から448までは、いずれも「草花」を詠んだ歌が続くことから、433、434の二首は「木」を詠み込んだ歌群の最後であるとともに、「草花」を詠み込んだ歌群の最初ともなる。「木」と「草花」を詠み込んだ歌二首をこの位置に置くことによって、「木」を詠み込んだ歌群から「草花」を詠み込んだ歌群への移行がスムーズになされることになる。

また、433、434の配列は、433が逢うことが稀になった人を恨む歌であるのに対し、434は人目を気にして逢えないのを私のせいにしないでほしいと詠んだ歌で、二首が贈答歌のような趣を呈していることから、433、434の順となったのであろう。

426から434までの歌群は、冒頭の426が読人しらず時代の歌人の歌、427から429までが撰者時代の歌人の歌、430が六歌仙時代の歌人の歌、431が撰者時代の歌人の歌、432から434までが読人しらず時代の歌人の歌となる。

なお、「あふひ」が夏に花開く草花であること、「あふひ」と「かつら」は、共に陰暦四月中の酉の日に行なはれる賀茂神社の葵祭に用ひられるもので、いづれも夏の植物である」ことは、以下の歌群との接続を考える上で注目される。

「あふひ」「かつら」を詠み込んだ433、434の二首に続くのは、「草花」を詠み込んだ歌群である。

くたに

僧正遍照

435 散りぬればのちはあくたになる花を思ひ知らずも迷ふてふかな

さうび

つらゆき

436 我は今朝うひにぞ見つる花の色をあだなる物といふべかりけり

をみなへし

もののり

437 白露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし
438 朝露をわけそほちつつ花見むと今ぞ野山をみなへしりぬる

朱雀院の女郎花合の時に、「をみなへし」といふ五文字を句のかしらにおきてよめる
つらゆき

439 小倉山峰たちならし鳴く鹿の経にけむ秋を知る人ぞなき

きちかうのはな
もののり

440 秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく

しをに
読人しらず

441 ふりはへていざ故里の花見むと来しをにほひぞ移ろひにける

りうたむのはな
もののり

442 わが屋戸の花踏みちらす鳥打たむ野はなければやここにしも来る

をばな
読人しらず

443 ありと見て頼むぞかたきうつせみの世をばなしと思ひなしてむ

けにごし
矢田部名実

444 うちつけに濃しとや花の色を見む置く白露の染むるばかりを

二条の後、春宮の御息所と申しける時に、めどに削り花させ

りけるをよませたまひける
文屋康秀

445 花の木にあらざらめども咲きにけりふりにし木の実なる時もがな

しのぶぐさ
紀利貞

446 山高みつねに嵐の吹き里はにほひもあへず花ぞ散りける

やまし
平篤行

447 郭公峰の雲にやまじりにしありとは聞けど見るよしもなき

からはぎ
読人しらず

448 空蟬の蛻は木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞ悲しき

「草花」を詠み込んだ歌群の最初の歌435は「くたに」を読み込み、続く

436は「さうび」を詠み込む。「くたに」はどのような植物を指すのか諸説あって確定できないが、「さうび」は「薔薇」で、バラの一種と考えてよいであろう。『源氏物語』乙女巻の六条院の東北の町の庭の様を語る文章の中に「昔おぼゆる花橘、撫子、薔薇、くたになどやうの花のくさぐさを植えて、春秋の木草、その中にうちませたり」とあることから、「くたに」「さうび」はともに夏に花咲く草花と解することができよう。

先の「木の花」を詠み込んだ歌群では、「うめ」「かにはざくら」「すももの花」「からももの花」と春の木の花が続き、その後夏に花咲く「たちばな」が並べられていたが、433から436では「あふひ」「くたに」「さうび」と夏に花咲く草花が並べられ、「木の花」を詠み込んだ歌群で春の花から夏の花が順に並べられたのを承けて、「草花」を詠み込んだ歌群ではまず「夏の草花」を詠み込んだ歌群が配される。

435、436の配列の順序は、433、434が読人しらずの歌であるのを承けて、六歌仙の一人遍照の歌である435が先に置かれ、撰者貫之の歌である436がその後配されたものと考えられる。

なお、「木と草花」を詠み込んだ433、434に詠み込まれた草花「あふひ」が和語であり、「木の花」の歌群に詠み込まれた「うめ」「かにはざくら」「すももの花」「からももの花」「たちばな」が和語であるのに対し、「くたに」「さうび」が漢語であることは注意されよう。

「くたに」「さうび」を詠み込んだ435、436に続く、437、438、439はいずれも「をみなへし」を詠み込んだ歌である。これは433から436の「夏の草花」を詠み込んだ歌群に続いて、ここに秋の草花の代表ともいえる「をみなへし」を詠み込んだ歌を三首置くことで、これ以降が「秋の草花」を詠み込んだ歌群であることを明示しようと意図したものと考えられる。

以下、440の「きちかう」は「桔梗」、441の「しをに」は「紫苑」、442の

「りうたむ」は「竜胆」でいずれも秋に花を付ける草花、443の「をばな」が秋の草花であることはいうまでもなからう。444の「けにこし」は『和名抄』に「牽牛子、陶隱居本草注云、牽牛子、和名阿左加保」とあり、「朝顔」のこと、445の「めど」は「めどはぎ」のことであり、これらも秋の草花ということができよう。ただし445では、「めど」は「削り花」を挿すものとして詠まれていることは注意される。446の「しのぶぐさ」は、諸注「のきしのぶ」のこととするが、「のきしのぶ」は花を付けな。この「しのぶぐさ」は松田武夫が指摘するように「わすれぐさ」の異名であり、秋に花を付ける「萱草」のことと解したい。¹⁰ 447「やまし」は「はなすげ」のこと、448の「からはぎ」は「萩」の一種で、いずれも秋に花を付ける草花である。

このように437から448までは「秋の草花」を詠み込んだ歌が配列される。このうち、歌群の冒頭「をみなへし」詠み込んだ437から439三首のうち最初の二首は、437が秋の野の花に蜘蛛が糸をかけたことを詠じ、438が秋の花を見ようと秋の野山に分け入ったことを詠ずるというように、歌の内容そのものもいずれも秋の草花を詠じているが、このこともこれ以降の歌群が「秋の草花」を詠み込んだ歌群であることを示す効果を持つといえよう。また、437、438は、438が「野山」を詠むのに対し、続く439が「小倉山」を詠むという共通性を有するが故に、437が前、438が後に配列されることになったのであろう。

それに対し、三首目439は「朱雀院の女郎花合の時に、「をみなへし」といふ五文字を句のかしらにおきてよめる」という詞書を有している。各句最初の字で物の名を表すのは折句と呼ばれる詠法である。物名歌とは、一首の歌の文字列の連続の中に、掛詞、縁語を含むその歌の意味内容を示す語と異なった語が詠み込まれている歌を指すのが一般的である。

折句も物の名を一首の中に詠み込んでいる点では同様であるが、連続した文字列として物の名が詠み込まれていない点で他の物名歌の部に収められた歌と相違する。また物名の部に収められる物名歌は、詞書にその歌に詠み込まれた物の名のみを記するのが一般的だが、この歌は長い詞書を有する点でも特異である。

また、445も「二条の後、春宮の御息所と申しける時に、めどに削り花させりけるをよませたまひける」という長い詞書を持った歌であり、「めど」が「あらざらめども」という文字列の中に詠み込まれている点で物名歌といえるが、「めど」の花が詠み込まれるのではなく、「めど」に削り花を挿した状態、すなわち「めど」に木を削って作った造花を挿したところを見て詠んだ歌であり、「秋の草花」を詠み込んだ歌群にふさわしくない。

このように、「秋の草花」を詠み込んだ歌群の中で、439と445が他の歌と異なった様相を呈しているのであるが、このことは439と445が対応関係を有していることを示しているのではなからうか。

そのように考えて437から448までの「秋の草花」を詠み込んだ歌群を見てみると、437と440は白露が草の置くことを詠じている点で対応し、438と441は野山や故里に「花見む」出かけることを詠じている点で対応する。また、440と444は白露が草葉や花の色を染めることを詠じている点で共通性を持ち、441と446は441が「ふる里の花」の移ろいを詠ずるのに対し、446は「嵐の吹く里」の花の散る様を詠じて共通する。442と447はともに鳥を詠じて対応し、443と448はともに「うつせみ」という語を詠み込むとともに世の無常を詠じている点で対応する。

このように見てくると、437から448までの歌群は以下に示す図のように、二首一組の対応関係によって構成されていることになる。

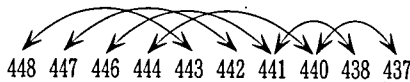


表2

この図から、長い詞書を持つ点で他の物名歌と異なる439と445の対応関係を除いてみると、以下のようにさらに整然とした構成となる。

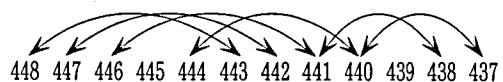


表1

では、表2のような整然とした構成を持つ歌群構成に、なぜ439と445のうに長い詞書を持つ特異な二首が挿入されたのであろうか。それは440から444までが、「をばな」を詠み込んだ443以外、いずれも440「きちかう」、441「しをに」、442「りうたむ」444「けにごし」と漢語の草花を詠じている点にあるのではなからうか。

すなわち、「秋の草花」を詠み込んだ歌群は、437から「秋の草花」を詠み込んだ歌群が始まることを明示するため、まず437以下三首に秋の代表的な草花である「をみなへし」を詠み込んだ歌を配置し、その後先の「夏の草花」を詠み込んだ歌群の後半二首、435、436が漢語の草花「くたに」「さうび」を詠み込んでいることを承けて、「秋の草花」を詠み込んだ歌群前半に漢語の草花を物名として詠み込んだ歌を配し、歌群の後半に和語の草花を物名として詠み込んだ歌と配そうとしたのではなからうか。440から444までの歌には、443を除き全て漢語の草花が詠み込まれているが、440から444までの歌群を挟む439と445に長い詞書を持つ特異な歌が配置されているのは、この439と445間に挟まれた歌群が、漢語の草花を詠み込んだ物名歌によって構成されていることを示そうとしたと思われるのである。

また、「秋の草花」を詠み込んだ歌群の前半、漢語の草花を詠み込んだ物名歌の歌群の中に「をばな」という和語の草花を詠み込んだ443が配置されたのは、漢語を詠み込んだ物名歌の中で441と444が対応し、ために漢語の物名と漢語の物名が対応した組が生じ、全体としての対称性を保つため和語の物名と和語の物名が対応した組を作る必要が生じたためと考えられる。

以上述べてきたことを整理すると、435から448までの関係は次のように図示される。

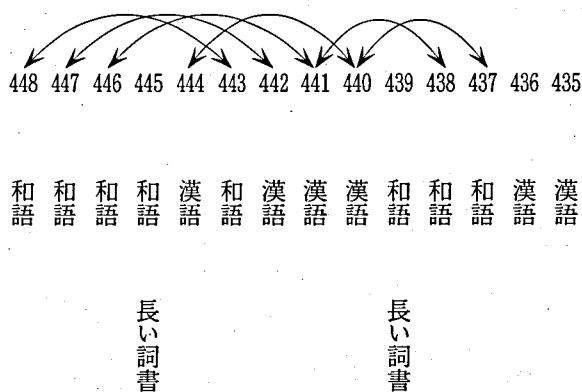


表3

このようにしてみると、「秋の草花」を詠み込んだ歌群は、歌の内容のならびに物名として詠み込まれた語が漢語か和語かを考慮して二首一組で対応関係を作りつつ、全体としては対称性を持つ構造となっていることが理解されよう。

次に、それぞれの歌がどのような理由でその位置に確定されたかを見ていくことにしよう。440の位置にはそれと対応する437の歌と類似した歌が配されるのがふさわしいが、「白露を玉にぬくとやささがにの花にも葉にも糸をみなへし」と詠じる437と「秋ちかう野はなりにけり白露の置ける草葉も色かはりゆく」と詠じる440、「うちつけに濃しとや花の色を見む置く白露の染むるばかりを」と詠じる444を比べてみると、437と440は

「白露」と「葉」の語を共有し、437と444は「白露」と「花」の語を共有するとうように、440、444はいずれも437と近い関係にある。にもかかわらず、440がこの位置に置かれたのは、440をこの位置に置くと歌の詠まれた場所が、439の山に続いて440は野、441が里、442が宿となるからであろう。440、441、442の位置がこのように固定されれば、それに対応する444、446、447の位置も自ずと定まってくる。また443と448の対については、443と444がともに何かを見てそれがむなしものだと言っているのに対し、447と448はともにある物を見ることができない状態を詠じている点で共通性を持つが故に、443が前448が後に配置されたのであろう。448が人の死を詠じている点も、448が歌群の最後に置かれるにふさわしいと判断される理由となったかもしれない。

また、長い詞書を持つ特異な歌の間に漢語の秋の草花が配置されている点に注目すると、夏の漢語の草花を詠み込んだ435、436も、長い詞書を持つ347と「あふひ」「かつら」を詠み込んだ433、434の間に配置されていることに気が付く。「あふひ」と「かつら」という二つ以上の物の名を詠み込んだ歌も物名の部では異例である。物名の部は漢語を詠み込んだ歌を特異な歌で囲い込むようにして配列がなされていると理解される。

なお437から448までの作者は、437から440までは撰者の歌、441が読人しらず時代の歌人の歌、442が撰者の歌、443が読人しらず時代の歌人の歌、444から446まで六歌仙時代の歌人の歌、447が撰者時代の歌人の歌、448が読人しらず時代の歌人の歌となる。

以下の歌群は、449から453までが一まとまりと考えられる。

かはなぐさ

ふかやぶ

449 うばたまの夢になにかはなぐさまむうつつにだにも飽かぬ心を

さがりごけ

高向利春

450 花の色はただひとさかり濃けれどもかへすがへすぞ露は染めける

にがたけ

しげはる

451 命とて露を頼むにかたければものわびしらに鳴く野辺の虫

かはたけ

景式王

452 夜ふけてなかばたけゆく久方の月吹きかへせ秋の山風

わらび

真静法師

453 煙たちもゆとも見えぬ草の葉を誰かわらびと名づけそめけむ

これら五首は、花を付けない、あるいは目立った花を付けない草を物の名として詠み込んだ歌群、つまり「草」を詠み込んだ歌群と考えられる。

一首目449の「かはなぐさ」は、『和名抄』に「水苔、弁色立成云、水苔、一名河苔和名加波奈」とあり、詳しいことは分からないが、以下の四首が花を付けない、あるいは目立った花を付けない草を物の名として詠み込んだ歌であることからすると、淡水に生える藻類で、花の咲かない草と考えるのが穏当であろう。

二首目450の「さがりごけ」は『観智院本名義抄』に「松蘿、マツノコケ、一云サガリゴケ、又云サルヲカセ、女蘿、同」とあるように、「さをがせ」のことであり、花を咲かせることはない。

三首目451の「にがたけ」四首目452の「かはたけ」については、「にが竹」「かは竹」とする説と、「にが茸」「かは茸」とする説、すなわち竹とする説と茸とする説があり、諸注その両説を並記する。452以下の歌を見るてみると、453は「わらび」の葉を詠んだ歌であり、454は「ささ」「まつ」「びは」「ばせをば」と葉を賞美する植物が詠み込まれている。453、454に葉を賞美する植物が五つも詠まれていることからすると、451、452の「にがたけ」「かはたけ」は「茸」ではなく、葉を付ける「竹」と見た方がよいように思われる。竹を草とするのはやや躊躇われるが、449

から453の歌群の最初の一首449が「かはなぐさ」を読み込み、最後の五首目453が「わらび」を読み込んだ歌であることからすると、『古今集』の撰者たちは「竹」を草の一種として扱ったと想像される。

五首目453には「わらび」が読み込まれているが、これは物名歌ではない。物名歌とは先にも定義したように、一首の歌の文字列の連続の中に、掛詞、縁語を含むその歌の意味内容を示す語と異なった語が読み込まれている歌を指すのであるが、453に詠まれた「わらび」は、「蕨」と「葉火」の掛詞であり、一首の表現する意味内容に「蕨」がそのまま活かされており、物名歌とはいえない。

先にも、439や445のように、折句や特別な詞書を付した通常の物名歌と異なった歌が存在したが、それらは漢語の物の名と和語の物の名を区別するために置かれたものであった。その点を考慮すると、この453も歌群の大きな切れ目を示すために置かれた特別な歌と考えられる。

確かにこの453の後には、454、455と「複数の植物」を読み込んだ物名歌が配列されており、「あふひ」と「かつら」を読み込んだ433、434以外、一つの物の名ばかり読み込んだ物名歌が配列されてきたこれまでの配列とは異なった様相を呈している。また、449の「かはなぐさ」を読み込んだ歌以降、450から452までは草か否かに断定できない歌が続いていた。こうした配列において、453に「蕨」を読み込み、かつ歌詞でも「蕨」を「煙たちもゆとも見えぬ草の葉」と詠ずる歌を置くことによって、ここまでの花を付けない草の歌群、すなわち「草」を読み込んだ歌群であることを示すとともに、449から453の「草」を読み込んだ歌群とこれ以降の454、455の「複数の植物」を読み込んだ歌群とが異質な歌群であることを示そうとしたのではなからうか。

「木の花」を読み込んだ歌群の次に「木」を読み込んだ歌群を配列し

たように、「草花」を読み込んだ歌群の次には「草」を読み込んだ歌群が配置されるのである。また、「草花」を読み込んだ歌群が、「夏の草花」を読み込んだ歌群、「秋の草花」を読み込んだ歌群と続いたのを承けて、450から452までは常緑の植物を配置することによって、冬という季節を表そうとしたとも考えられる。

なお、449から453までの配列の順序は以下のようにして決められたと考えられる。まず453は、歌の特殊性から「草」を読み込んだ歌群の最後に配置され、それによって続く歌群との相違を明確にする。451、452はともに「たけ」を読み込んでいるからまとめて配列される。「さがりごけ」を物の名として読み込んだ450は、「露」を詠じている点で、「にがたけ」を物の名として読み込んだ451と連続する。「かはなぐさ」を物の名として読み込んだ449は「たけ」を物の名として読み込んだ451、452より、「さがりごけ」を物の名として読み込んだ450に近い。また「かはなぐさ」という物の名は「草」という語を含んでおり、「草」を読み込んだ歌群の冒頭に置くのに最もふさわしい。このような点が考慮された結果、449から453という歌の配列がなされたと思像される。

続く454、455の歌は複数の物の名、それも植物の名を読み込んだ歌群であり、「複数の植物」を読み込んだ歌群とすることができよう。

ささ まつ びは ばせをば 紀乳母
454 いささめに時待つまにぞ日は経ぬる心ばせをば人に見えつつ

なし なつめくるみ 兵衛

455 あじきなし歎きなつめを憂きことにあひくる身をば捨てぬものから
一首目454に読み込まれる「ささ」「まつ」「びは」「ばせをば」は、先にも述べた通り、いずれも葉を賞美する植物であるという点で共通する。このうち「ささ」は草に分類される点で449から453までの「草」を読み込

んだ歌群と連続性を示すのに対し、「まつ」「びは」は明らかに木であって、「草」を詠み込んだ歌群と断絶を示す。また「ばせをば」は草か木か判断に迷うところであるが、451、452の「たけ」を「竹」とし、「草」として分類した点を考慮すると、「草」に分類すべきであろうか。とすると、453は、それ以前の「草」を詠み込んだ歌群と連続する「ささ」「ばせをば」、さらに木である「まつ」「びは」という植物の名が詠み込まれていることになる。454は「ささ」「まつ」「びは」「ばせをば」と葉を賞美する植物を詠み込んでいる点でそれ以前の歌群451から453と連続しつつも、「草」から「木」へと詠み込まれる物の名が変化することで、それ以前の「草」を詠み込んだ歌群から「木」を詠み込んだ歌群に推移していく様が見て取れる。また、「びは」は葉を賞美するとともに、その実を賞美する植物である。これは454に続く455がみな果実を賞美する木を詠み込んでいることと連続性を持つ。

455は「なし」「なつめ」「くるみ」というように、いずれも「木」を詠み込んでおり、しかも詠み込まれた「木」は全てその果実を賞美する木である。このうち「なし」は春に美しい花を咲かせることからすると、426から429の「春の木の花」を詠み込んだ歌群との対応性を示すと見ることもできよう。「植物」を詠み込んだ歌群は、春の植物、夏の植物、秋の植物、冬の植物を詠み込んだ後、再び春の植物を詠み込んだ歌へと回歸するのである。

なお、449から453の「草」を詠み込んだ歌群、および454、455の「複数の植物」を詠み込んだ歌群の作者は、449から452までが撰者時代の人物、453、454が六歌仙時代の人物、455が撰者時代の人物ということになる。

456以下は次のような歌が並ぶ。

からことといふ所にて春の立ちける日よめる

安倍清行朝臣

456 波の音の今朝からことに聞ゆるは春のしらべやあらたまるらむ

いかがさき 兼覧王

457 楫にあたる波のしづくを春なればいかがさきちる花と見ざらむ

からさき 阿保経覧

458 かの方にのいつからさきに渡りけむ波路はあとも残らざりけり

伊勢

459 波の花沖から咲きて散りくめり水の春とは風やなるらむ

かみやがは つらゆき

460 うばたまのわが黒髪やかはらむ鏡の影に降れる白雪

よどがは

461 あしひきの山辺にをれば白雲のいかにせよとか晴るる時なき

かたの ただみね

462 夏草のうへは繁れる沼水のゆく方のなきわが心かな

かつらのみや 源忠

463 秋くれば月の桂の実やはなる光を花と散らすばかりを

456の詞書は、物名の部に収められる歌の詞書の多くが、その歌に詠み込まれた物の名を記すのみであるのに、その詠まれた状況を記している。物名の部で、このような詞書が付されている場合、そこに歌群の大きな切れ目が存することは既に見てきた通りであるが、この456もここから新たな歌群が始まることを示している。456から463に詠み込まれている物の名のうち、456から462までは全て地名である。また、463に詠み込まれた

「かつらのみや」建物ではあるが、場所を示すという点で地名と考えてよいであろう。とすると456から463までの歌群は全て地名を詠み込んでおり、「地名」を詠み込んだ歌群としてまとめることができよう。これら

八首の配列の仕方を見ると次のようになる。

まず456であるが、これは先に指摘したように、詞書が特殊であること他に、他の六首が詠み込んでいる地名が「崎」「河」「宮」というように限定された場所の名であるのに対し、「からこと」という広範な地域を示す地名を詠み込んでいることから、「地名」を詠み込んだ歌群の冒頭に置かれることになったのであろう。

続く457は「いかがさき」、458、459は「からさき」というようにいずれも「岬」を詠じ、かつ三首ともいずれも波を詠んでいる点で共通する。また、457、459は波を花と見立てる技法を用いている点でも共通し、457から459の三首は458を中心に左右対称の構造を形成している。さらに、456と459は岸に寄せる波を詠じて対応し、457と458は舟にあたる波を詠じて対応するというように、456から459の四首は図に示すような対応関係を有している。



これを見ると、この四首の一首目456と対になる459が四首の一番最後に配され、二首目457から四首目459が三首目458を中心に左右対称に配置されていることが理解される。

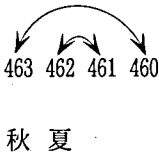
460、461はいずれも「河」を詠み込んだ物名歌である。460以前は、456の「からこと」、457の「いかがさき」、458、459の「からさき」と、いずれも海、湖に近接した地名が詠み込まれていることから、456から459に次いで「河」すなわち海や湖とともに水に関連した「河」の名を詠み込んだ460、461が配置されたのであろう。

460、461の配列順は、461の歌の内容が恋の歌であり、続く462も恋の歌であることから460が先、461が後に置かれたと考えられる。また、460に詠み込まれた「かみやがは」が都の中を流れる河であり、「淀川」に流れ込む支流であることから、まず「かみやがは」を詠み込んだ460を先に置き、次に「よどがわ」を詠み込んだ461を置いたのかもしれない。

462は、「かたの」という「野」が詠み込まれている。これまでの地名が「水」に関する地名であったのに対し、462は「野」を詠み込んだ地名であるので、「水」に関する地名を詠み込んだ歌群の後に置かれることになったのであろう。

「地名」を詠み込んだ歌群の最後の歌は、「かつらのみや」という建物が詠み込まれている。先に述べたように、「宮」という建物も場所を表すという点では地名とすることができようが、これまで詠み込まれてきた地名が自然に存在する場所を示す名であるのに対し、「宮」は人工的に作られた場所を示す名であることを考慮すると、463は当然「地名」を詠み込んだ歌群の最後に位置せしめられることになるのであろう。

なお、463は光を花と見立てる技法を用いており、白髪を雪に見立てる460と対応し、461と462が恋の思いを詠じて対応すると見ることできる。地名を詠じた歌群の最初の四首のうち456、457、459が春の歌であるのに対し、地名を詠じた歌群の最後から二首目462が夏の歌であり、地名を詠じた歌群の最後の歌463が秋の歌であることも注意してよいかもしれない。



456から463までの作者は、456は六歌仙時代の歌人で、以下463までは撰者

時代の歌人である。

「地名」を詠み込んだ歌群の後は、次のような物の名を詠み込んだ歌群が続く。

百和香

読人しらず

464花ごとに飽かず散らしし風なればいくそばくわが憂しとかは思ふ

すみながし

しげはる

465春霞なかし通ひ路なかりせば秋くる雁は帰らざらまし

おき火

都良香

466流れいづる方だに見えぬ涙川沖ひむときや底は知られむ

ちまき

大江千里

467のちまきのおくれて生ふる苗なれどあだにはならぬたのみとぞ聞く

「は」をはじめ、「る」をはてにて、「ながめ」をかけて時の歌をよめ、と人の言ひければよみける

僧正聖宝

468花のなか目に飽くやとてわけゆけば心ぞともに散りぬべらなる

464から468には、「百和香」「すみながし」「おき火」「ちまき」「ながめ」等、身のまわりにある様々な物の名が詠み込まれている。物名の部は、これまで「鳥」を詠み込んだ歌群、「虫」を詠み込んだ歌群、「植物」を詠み込んだ歌群、「地名」を詠み込んだ歌群と続いてきたが、464から468はその他諸々の物の名を詠み込んだ、「雑名」の歌群とすることができよう。

これら五首は、464と468が花の散る様を詠じて対応関係を有し、465が春から秋の事柄を詠ずるのに対し、467が春、ないし初夏から秋にわたる事柄を詠ずるというように対応関係を有している。

468が「は」をはじめ、「る」をはてにて、「ながめ」をかけて時の歌

をよめ、と人の言ひければよみける」という物名の部では特殊な詞書を有し、「はる」が特殊な形で詠み込まれているのに対し、464の作者が読人しらずであることを考慮すると、これら五首の歌群の中で、464が歌群の一番最初、467が歌群の一番最後に配置されるのがもっとも理に合った配列ということになる。

このように歌群の最初と最後の歌の配列が決まると、465と467の対が464と468の配列の内側に配列され、五首全体が466を中心に左右対称の構造をなし、配列がもっとも均整のとれたものとなる。では、465と467のどちらを先に置くかということになるが、464に詠み込まれた「百和香」に近いのは、467に詠み込まれた「ちまき」より465に詠み込まれた「すみながし」ということになり、465が前467が後に配列されることになる。464から468の配列順はこのようにして決定されたのであろう。

464から468の作者は、464が読人しらず、対称構造の中心となる466が六歌仙時代の人物、その他は撰者時代の人物となる。

なお、468は「は」の字を歌の初め、「る」の字を歌の終わりに置くという形で「春」を詠み込むと同時に、歌一首の内容も春に詠まれたものとなっている。これは巻十物名の部が

うぐひす

藤原敏行朝臣

422心から花のしづくにしほちつつ憂くひずとのみ鳥の鳴くらむ
という春の歌で始まっていたのと対応するし、『古今集』の巻頭歌が立春の歌で始まっていたこととも対応しよう。また巻十一、恋一の部が

題しらず

読人しらず

469郭公鳴くや五月のあやめぐさあやめも知らぬ恋もするかな
という夏の歌ではじまっていることとも連続性を有するということになる。

注

(1) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』(風間書院、昭和40年)は、物名の部は、鳥虫・植物名(前半部)、地名・雑名(後半部)という構成をとっているとする。

(2) 『古今集』は『新編日本古典全集』に拠る。

(3) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』397頁では、物名の巻頭歌四首について、「春の鶯、夏の郭公・空蟬といふ季節の關係は存してゐる。又鶯と郭公の歌の意味は、題の鶯と郭公に關係があるが、空蟬の二首の内容は、直接、空蟬とはなんら關係がない」と指摘する。

(4) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』399頁では、「この四首となった植物はいづれも梅・桜・桃といった春開花する顕花植物であつて、それを、ほぼ季節の順に従つて並べてゐることが了解される」と指摘する。

(5) 『日本国語大辞典』(第二版)に拠る。

(6) 『倭名抄』は、『諸本集成倭名類聚抄』(臨川書店、昭和43年)所収『真福寺本』に拠る。

(7) 『日本国語大辞典』(第二版)に拠る。

(8) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』400頁。

(9) 『源氏物語』は、『新編日本古典文学全集』に拠る。

(10) 松田武夫『古今集の構造に関する研究』403頁。『大和物語』には次のような章段がある。

また、在中将、内にさぶらふに、御息所の御方より、忘れ草をなむ、
「これはなにとかいふ」とてたまへりければ、中将、

忘れ草生ふる野べとはみるらめどこはしのぶなりのちも頼まむ
となむありける。おなじ草を忍ぶ草、忘れ草といへば、それによりな
む、よみたりける。

とあるが、『伊勢物語』では、同じ歌が次のような詞章のもとに収められて
いる。

むかし、男、後涼殿のはさまを渡りければ、あるやむごとなき人の御
局より、「忘れ草を忍ぶ草とやいふ」とて、いだせたまへりければ、
たまはりて、

忘れ草おふる野辺とは見るらめどこはしのぶなりのちも頼まむ

(百段)

『伊勢物語』諸注は、この段から忘れ草と忍ぶ草は別の植物であり、『大和物語』が間違えたのであらうとするが、この章段の表現からそのように断定できるであらうか。『伊勢物語』と『大和物語』の表現からは、忘れ草と忍ぶ草を同じ草と考えることもできるのではないだろうか。

(11) 片桐洋一は、『古今和歌集全評釈』(講談社、平成10年)で『宇津保物語』国譲下巻に「山の法師ばら(中略)おもひの炊がせ、御前の朽ち木に生ひたるくさびらども薬物にせさせ、にがたけなど調じて、銀の金匱に入れつつ参れば、君達興じつつ召し添へ参る」とあり、『伊呂波字類抄』にも「苦園ニガタケ」とあることから、茸の可能性は高いとしながら、『後撰集』雑四・一二七二に、

女友達の常にいひかはしけるを、ひさしく訪れざりければ、十月ばかりに、「あだ人の思ふと言ひし言の葉は」といふ古事を言ひかはした
りければ、竹の葉に書きつけてつかはしける よみ人知らず
うつろはぬ名に流れたる河竹のいづれの世にか秋を知るべき
とあり、『枕草子』の「あはれなるもの」の段にも

夕暮れ、曉に、かはたけの風に吹かれたる、目さまして聞きたる。

とあることから、「河竹」の可能性もあると指摘し、『名義抄』に「苦竹カハタケ宜作。河竹同也。竹苦竹カハタケ」とあり、『和名抄』にも「苦茸四声字苑云苦。(中略)弁色立成云、苦茸・加波多介。(中略)竹名也」とあるのを見ると、「にがたけ」と「かはたけ」は、同名異名で、どちらも「茸」ではなく「竹」であったと見るべきでないかと指摘する。

(12) 454も常緑の植物を詠み込んでるので、冬の植物と見ることが出来る。

(13) 松田武夫は、『古今集の構造に関する研究』407頁で、454、455に詠み込まれた植物を全て食用植物とする。

(14) 松田武夫は、『古今集の構造に関する研究』409頁で456から461までの六首は、「いづれも海や川に關係ある地名を隱題とした歌ばかりを、それぞれ分類して掲げてゐる」とする。